

個 体 群 生 態 学 会 会 報

No. 72

2015 年 8 月

第 10 回「個体群生態学会奨励賞」候補者募集	会長 齊藤 隆	1
第 31 回個体群生態学会大会（彦根大会）開催のお知らせ（2015 年 10 月 10 日～12 日）	沢田裕一・西田隆義	2
第 30 回個体群生態学会大会（つくば大会）開催報告（2014 年 10 月 10 日～12 日）	徳永幸彦	4
伊藤嘉昭先生追悼特集	齊藤 隆・蠟山朋雄・藤崎憲治・椿 宜高・嶋田正和・粕谷英一・辻 和希	9
事務局報告	内海俊介	20
Population Ecology 編集報告	佐藤一憲	27
会員異動		30
編集後記	津田みどり	32

個体群生態学会

2016年度「個体群生態学会奨励賞」候補者募集

「個体群生態学会奨励賞」は、個体群生態学の一層の発展を図ることを目的として、個体群生態学の優れた業績を挙げた国内外の若手研究者を表彰するものです。本学会員、もしくは、**Population Ecology**（あるいは **Researches on Population Ecology**）に論文を掲載したことのあ
る者を対象とし、自薦による応募者もしくは会員から推薦された者の中から、毎年1名の受賞者
を選考して賞状が贈呈されます。受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨
を充分ご理解のうえ、ふるってご応募・ご推薦いただきますようお願いいたします。

2015年7月1日

個体群生態学会会長

齊藤 隆

記

1. 受賞候補者の条件：個体群生態学会の若手会員、もしくはPopulation Ecology (Researches on Population Ecology) に論文を掲載したことのあ
る若手研究者
2. 応募書類：(1) 候補者の氏名・所属・連絡先、(2) 略歴（他薦の場合はわかる範囲で記入）、
(3) 業績リスト（主な業績5件までに○印を記入）、(4) 推薦の理由（A4用紙1枚以内）。た
だし、選考委員会から追加資料を問い合わせることがあります。
3. 送付先：Emailか郵便でお送りください。Emailの件名か郵便封筒の表に、「個体群生態学会奨励
賞応募書類」と記入してください。受領確認の連絡がない場合は問合せください。

〒074-0741 北海道雨竜郡幌加内町母子里

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

個体群生態学会事務長 内海俊介

(email:utsumi@fsc.hokudai.ac.jp)

4. 締切：2016年3月31日（必着）

以上

第 31 回個体群生態学会大会開催のお知らせ

沢田裕一 (大会会長)・西田隆義 (実行委員長)

日時：2015 年 10 月 10 日 (土) ~12 日 (月)
滋賀県立大学 交流センターおよび総合交流会館
〒 305-8577 滋賀県彦根市八坂 2500

大会ウェブページ：<https://sites.google.com/site/populecol31/>

大会参加費・懇親会費

		一般会員	学生会員	非会員
大会参加費	9 月 10 日まで	6,000 円	4,000 円	7,000 円
	9 月 11 日から	7,000 円	5,000 円	8,000 円
懇親会費	9 月 10 日まで	5,000 円	3,000 円	6,000 円
	9 月 11 日から	6,000 円	4,000 円	7,000 円

大学の学類 (学部) 学生 (中・高校生を含む) の大会参加費は無料とする。ただし、学類 (学部) 学生が発表をする場合は、学生会員として大会参加費を払うものとする。

参加費・懇親会費振込先

口座名：第 31 回個体群生態学会大会
(ダイサンジュウイッカイコタイグンセイタイガッカイタイカイ)
口座番号：00920-9-173921

大会日程 (予定)

10 月 10 日 (土)	14 時~17 時	運営委員会
	16 時~18 時	これからの 30 年：生態学の大問題は何か？
10 月 11 日 (日)	09 時~12 時	基調シンポジウム A
	12 時~14 時	ポスターコアタイム A
	14 時~16 時 30 分	企画シンポジウム
	17 時~18 時 20 分	総会
	18 時 30 分~20 時 30 分	懇親会
10 月 12 日 (月)	09 時~12 時	基調シンポジウム B
	12 時~14 時	ポスターコアタイム B
	14 時~16 時	企画シンポジウム

基調シンポジウムA: Unappreciated role of sexual interactions in population and community ecology

企画者：京極大助・鈴木紀之

生物群集における特殊化—一般化、ニッチ・生息場所の分割などについて、近縁種間の性的な相互作用 (繁殖干渉) が大きな役割を果たしていることが近年、急速に分かってきています。そこで、この

シンポジウムでは、チョウ、マメゾウムシ、捕食性テントウムシなどの種間関係の研究者と、性的相互作用がどの程度持続するのかを理論的に研究されている方を講演者として、これまでうまく説明ができなかった課題がどこまで解明されたか、残されている課題は何かについて、幅広い立場から講演してもらいます。内容の一部については、Population Ecology の特集 “reproductive interference” を参考にしてください。

Speakers

Magne Friberg (Uppsala Univ.): Host plant and habitat partitioning in butterflies
京極大介 (京都大学) : Ecological and evolutionary implications of interspecific sexual interactions

鈴木紀之 (立正大学) : Ecological specialization and generalization: a new perspective

山口諒 (九州大学) : Reproductive character displacement by the evolution of female mate choice

基調シンポジウムB: Biogeography: spatial partitioning of diversifying lineages

企画者: 西田隆義

生物の分布を説明するのは、生態学の主要な課題とされてきたにもかかわらず、現在、生物地理は移動と系統による説明が大勢となっています。本シンポジウムでは、生物間の負の相互作用に基づいて生物の分布を説明する試みを紹介します。重要な負の相互作用として、性的な相互作用とともに、性的な相互作用が重要でない場合や種間競争が種内競争よりも卓越する場合も考慮します。また、すでに種分化した系統群だけでなく、現在、種分化が進行中と考えられる系統群における潜在的な相互作用についても扱います。

Speakers

西田隆義 (滋賀県立大) : Simple rules of invasion order in biogeography

辻 和希 (琉球大) : Invasion and displacement in ant community: general principles

Evan P. Economo (OIST) : Taxon cycles in ant community in oceanic islands

高倉耕一 (滋賀県立大) : Island biogeography of invasive vs. native plants

秋元信一 (北大) : Diversified sexual interactions among closely related lineages

これからの30年: 生態学の大問題は何か?

個体群生態学会は1961年の創立からすでに50年以上経過しました。創立時の会員は30歳以下の若い研究者ばかりで、個体群生態学の課題について熱い議論が交わされていました。この企画では、そうした“青い”熱気を復活させたいと思います。これまでどんな問題が提起され、どのように解決し、あるいは解決されていないのかを振り返るとともに、これからの生態学の課題についてざっくばらんに、無礼講で議論したいと思います。学会の初期の伝統に戻って若い人を中心に議論をし、年長の“えらい研究者”にも参加してもらいます。どんなユニークな意見が出るか、乞うご期待。

企画シンポジウムの企画募集のお知らせ

公募の結果にもとづき、2件ほどを選定する予定です。

一般講演 (ポスター発表)・参加の申し込み

一般講演 (ポスター発表) の申し込みは、大会ウェブサイトをよく読んで、要領に従って申し込ん

で下さい。

第31回大会実行委員会 大会会長：沢田裕一（滋賀県立大）

実行委員長：西田隆義、実行委員：高倉耕一（滋賀県立大）、京極大助（京大）、鈴木紀之（立正大）

最新の情報は、大会ウェブサイトをごらんください。

第30回個体群生態学会大会 開催報告

徳永 幸彦

第30回個体群生態学会大会は、2014年10月10日から12日までの3日間、筑波大学メインキャンパス内の大学会館および総合交流会館にて開催された。1日目の午後には秋の学校「行列のできる統計学相談所」を開催した。中会議室がほぼ埋まるほどの盛況で、事前に応募してきた質問を中心に、翌日の統計関係の基調講演に繋がる議論を展開することができた。飛び入りの質問もあり得る難しい状況での相談役を、快く引き受けて下さった粕谷氏と三中氏には、この場を借りて感謝を申し上げたい。また、基調講演の演者の一人である、Mark L. Taper 氏の積極的な参加が印象に残った（相変わらず Taper 氏の独特のリズムを持った英語の通訳は大変で、1986年の伊豆熱川での第13回大会を彷彿とさせるものだった）。

大会基調シンポジウムは2題開催した。1つ目は徳永が企画した Statistics and population ecology で、基調講演者としてアメリカから Mark L. Taper 氏 (Montana State University) と Robert M. Dorazio 氏 (Southeast Ecological Science Center) の2名を招聘し、加えて大会会長でもある山村光司（農環研）氏の3人で、Evidential, Bayesian, そして Fisherian Statistics の世界を紹介して頂いた。この基調シンポジウムの内容は Population Ecology 誌の特集として、現在編集集中である。もう1題は、カナダから招聘した William A. Nelson 氏 (Queen's University) と山中武彦（農環研）氏が共同企画した Scaling from life history traits to the population dynamics で、企画者2名の他に、アメリカからは Ottar N. Bjornstad 氏 (Pennsylvania State University) を、日本からは山道直人（京都大学）氏に講演をお願いした。この基調シンポジウムの内容は、現在山道氏を中心に、Population Ecology 誌の特集が組まれている。

公募による企画シンポジウムとして、「相互作用

系の多面的理解から明らかにする個体群生態学」、 「バラエティに富んだ食卓を守るために～農業をめぐる送粉者と害虫防除の個体群生態学～」そして「Rice, bugs, and egrets」の3件が開催され、活発な議論が行われた。個体群生態学会奨励賞は今年横溝裕行（環境研）氏が受賞し、受賞講演を行った。ポスター発表は41題と第29回大会と比べてほぼ2倍となり、盛況であった。嶋田正和（東大）氏の計らいで、東大に集中講義で来日中の Joel Cohen (The Rockefeller University) 氏が2日目の懇親会から途中参戦するというハプニングもあり、懇親会は大いに盛り上がった。

本大会では印刷された宣伝用ポスターは配布せず、情報の発信は完全バイリンガルのHPによるものだけとした。大会受付も Contents Management System (CMS) の1つである Drupal を用いて構築し、プログラムや要旨集も HP で集めた受付情報から自動作成できるようにプログラム化した。大会準備も Drupal を使った実行委員会専用のHPを通じて情報の一元化を行った。また、当日の受付も、紙媒体を極力排して、iPad を使った受け付けシステムを採用した。「できるはずだ！」という私の主張を真に受け、システムを構築してくれた益子美由希（農環研）氏には、頭が下がるばかりである。

財政面では、例年同様シュプリンガーから20万円の補助があった。基調講演のつくば宿泊費と昼食代は、大会運営費より支出した。統計学の基調講演と一部の企画シンポ、および秋の学校の国内、国外からの講演者の招聘費は、科学研究費補助金基盤研究C（代表者：徳永幸彦）より支出した。これらの支援によって、大会収支は黒字となることができた。

最後に、私と共に大会委員長を引き受けて下さった山村光司氏、会計担当の吉田勝彦氏、Web 担当の益子美由希氏、懇親会担当の横井智之氏、基

調講演の企画担当の山中武彦氏、アルバイト統括の香月雅子氏、大会の準備や運営を手伝って下さった筑波大学個体群生態関係の学生諸氏、企画シンプオの企画者、個体群生態学会事務局や運営委員の方々、大学会館と総合交流会館、および関連機器の無料利用を認めて下さった筑波大学、大会用

のネットワークを許可して下さった筑波大学学術情報メディアセンター、NPO 法人化前の個体群生態学会のネタとしての統計企画を山村氏と私に密かにノルマとして課して下さった斎藤隆会長、そして何よりも、本大会に参加して下さった皆さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。

■会期：2014年10月10日（金）～12日（日）

■会場：筑波大学大学会館・総合交流会館

■大会実行委員会：山村光司（大会会長）、徳永幸彦（大会会長、実行委員長）、山中武彦、横井智之、吉田勝彦、大橋一晴、香月雅子、益子美由希

■参加者内訳（アルバイト学生を含む）

大会参加：91名

ポスター発表：41件

懇親会：46名

■個体群生態学会奨励賞 受賞講演

Mathematical models for effective management of populations subject to uncertainty
横溝裕行（国立環境研究所・環境リスク研究センター）

■ポスター賞

最優秀賞

- ・鳥のさえずりの地理的変異と種の認知：方言に対する反応の非対称性
濱尾章二（国立科学博物館・動物研究部）

優秀賞

- ・The form of an evolutionary tradeoff affects eco-evolutionary dynamics in a predator-prey system
*Minoru Kasada (Univ. of Tokyo), Masato Yamamichi (Univ. of Kyoto), Takehito Yoshida (Univ. of Tokyo)
- ・シロアリ女王の秘策：卵門を閉じて王と同居しながら単為生殖
矢代敏久（京大院・農・昆虫生態）、松浦健二（京大院・農・昆虫生態）
- ・性の存在が群集動態に与える影響：ギルド内捕食系を用いた理論的検証
川津一隆（龍谷大・理工）

■基調シンポジウム A

Statistics and Population Ecology

Organizer: Yukihiro Toquenaga (Univ. of Tsukuba, Japan)

- ・Evidential Statistics: A path between the paradigms
Mark L. Taper (Montana State University, U.S.A.)
- ・Bayes approach as an approximation to maximum likelihood estimation
Kohji Yamamura (NIAES, Japan)
- ・Bayesian Data Analysis in Ecology: Motivations, Methods, and Benefits
Robert M. Dorazio (SESC, U.S.A.)

■基調シンポジウム B

Scaling from Life History Traits to the Population Dynamics

Organizer: William A. Nelson (Queen's University, Canada), Takehiko Yamanaka (NIAES, Japan)

- ・Recurrent Insect Outbreaks Caused by Temperature-Driven Changes in System Stability
William A. Nelson (Queen's University, Canada)
- ・Multi-generation population dynamics in seasonal environments: generation separation versus smearing

Ottar N. Bjornstad (Pennsylvania State University, U.S.A.)

- Moth outbreak dynamics across Japan suggest evolution at the northern range limit
- *Takehiko Yamanaka (National Institute for Agro-Environmental Sciences), Yasushi Sato (National Institute of Vegetable and Tea Science)
- Timing and propagule size of invasion determine its success by a time-varying threshold of demographic regime shift
- Masato Yamamichi (Kyoto University, Japan)

■企画シンポジウム 1

相互作用系の多面的理解から明らかにする個体群生態学

企画者：熊野了州（沖縄県病害虫防除技術センター）

コメンテーター：鈴木紀之（立正大学）

- 同一資源を利用するイモゾウムシとアリモドキノウムシの種間競争
栗和田隆（鹿児島大）
- イモゾウムシの対寄生蜂戦略：植食性ジェネラリストにおける天敵不在食草の選好性
鶴井香織 1, 2, 3、熊野了州 1, 2, 3、豊里哲也 1, 2、松山隆志 1、立田晴記 3
(1 沖縄県病害虫防除技術センター、2 琉球産経株式会社、3 琉球大)
- イモゾウムシ大量増殖における病原性原虫 (*Farinocystis* sp.) の発生
大石 毅 1、照屋清仁 1、鶴井香織 1, 2, 3
(1 沖縄県病害虫防除技術センター、2 琉球産経株式会社、3 琉球大)
- イモゾウムシの内部共生細菌が宿主に与える影響
細川貴弘（九州大）

■企画シンポジウム 2

バラエティに富んだ食卓を守るために～農業をめぐる送粉者と害虫防除の個体群生態学～

企画者：横井智之（筑波大学）・大橋一晴（筑波大学）

コメンテーター：中村 純（玉川大）

- バラエティに富んだ食卓のためにできること
横井智之（筑波大）
- Two serious problems in agroecosystems; invasive alien species and chemical pesticides
笠井 敦（国環研）
- 生物的防除：農地生態系サービスのエージェントである天敵生物の活用
上野高敏（九大）
- The importance of pollination service to crop production in Japan
小沼明弘（農環研）

■企画シンポジウム 3

Rice, bugs, and egrets

Organizer: Miyuki Mashiko (NIAES, Japan)

- Colony dynamics of heron and egret communities in Japan: ecological and historical perspectives
*Miyuki Mashiko (NIAES, Japan), Yukihiro Toquenaga (University of Tsukuba, Japan)
- Long-term trends of breeding herons and egrets, and their foraging ecology in rice fields of Italy
*Mauro Fasola, Elisa Cardarelli, Daniele Pellitteri-Rosa, Luigi Raghetti (Pavia University, Italy)
- Arthropods and their ecological function in heron breeding colonies
Shinji Sugiura (Kobe University, Japan)
- Changes in colony site selection strategies of herons and egrets over the years: new statistical methods for studying habitat selection
*Luis Carrasco, Yukihiro Toquenaga (University of Tsukuba, Japan)

■ポスター発表

[P01] 佐渡市における環境と経済の好循環のための数理的研究：生態系動態とヒトの選択動態の結合モデル.

- 横溝裕行(国環研)
- [P02] アブラムシに化学擬態する捕食者のアリを騙すメカニズム. 林正幸、野村昌史 (千葉大院・園芸・応用昆虫)
- [P04] 少数個体からなる群れからみる群れの起源. 新里高行 (筑波大)、三具和希 (筑波大)、村上久 (神戸大)、都丸武宣 (神戸大)、園田耕平 (滋賀大)、西山雄大 (大阪大)、郡司ペギオ幸夫 (早稲田大)
- [P05] Male-killer prevalence in a sympatric population of specialist and generalist *Harmonia* ladybirds. Suzuki Noriyuki (Tohoku Univ.), Naoya Osawa (Kyoto Univ.)
- [P06] The form of an evolutionary tradeoff affects eco-evolutionary dynamics in a predator-prey system. Minoru Kasada (Univ. of Tokyo), Masato Yamamichi (Univ. of Kyoto), Takehito Yoshida (Univ. of Tokyo)
- [P08] 鳥のさえずりの地理的変異と種の認知:方言に対する反応の非対称性. 濱尾章二 (国立科学博物館・動物研究部)
- [P10] 徒花の意味. 江副日出夫(大阪府大・院・理)
- [P12] 生態学的個体群制御と群集ネットワークの複雑性. 近藤倫生(龍谷大・理工)、舞木昭彦(島根大・生物資源)
- [P16] シロアリ女王の秘策:卵門を閉じて王と同居しながら単為生殖. 矢代敏久(京大院・農・昆虫生態)、松浦健二(京大院・農・昆虫生態)
- [P18] 生息環境の細分化の程度と種間競争の結果. 穴澤正宏(東北工大・工・環境)
- [P19] Accounting for the spatial structure of communities in the estimation of transition probabilities subject to observation errors. Keiichi Fukaya (ISM), J. Andrew Royle (USGS), Takehiro Okuda (NRIFS), Masahiro Nakaoka, Takashi Noda (Hokkaido Univ.)
- [P20] 性的対立の波及効果:より発達した交尾器の棘をもつオスほど他種メスにコストを与える. 京極大助、曾田貞滋(京大・理・動物生態)
- [P21] セイタカアワダチソウの侵入地とその起源集団におけるアワダチソウゲンバイの密度の比. 坂田ゆず(京大・生態研)、Timothy Craig (University of Minnesota, Duluth), Joanne Itami (University of Minnesota, Duluth), 大串隆之 (京大・生態研)
- [P22] Natural selection, genetic variation, and plasticity in eco-evolutionary dynamics: a case study of *Plantago lanceolata*. Richard P. Shefferson (University of Tokyo), Deborah A. Roach (University of Virginia)
- [P26] キアゲハの季節多型(春型・夏型)の適応的意義:体温調節か保護色か? 正木奈穂、西口泰平、石原道博(大阪府大・院・理)
- [P27] 小標本データに対するブートストラップ信頼区間の構成. 岡村 寛・市野川 桃子(中央水研)
- [P28] 性の存在が群集動態に与える影響:ギルド内捕食系を用いた理論的検証. 川津一隆
- [P29] ダムによる魚の移動阻害の影響—メタ生態系モデルを用いたメコン川ダム開発の影響評価. 吉田勝彦(国立環境研・生物)、広木幹也(国立環境研・生物)、富岡典子(国立環境研・地域)、村田智吉(国立環境研・地域)、福島路生(国立環境研・生物)
- [P30] ハダニの交尾前ガード行動と捕食リスク:気にするメス、しないオス. 奥圭子^{1,2,3}, Erik H. Poelman², Peter W. de Jong², Marcel Dicke²(1JSPS 海外学振, 2Wageningen Univ., 3 中央農研)
- [P31] Does group size influence aggressive behavior of *Formica japonica* in group fighting? Suguru Sasaki and Gaku Takimoto (Toho University)
- [P32] 生活史雑食による捕食-被食関係の逆転とギルド内捕食系の共存. 川田尚平、瀧本岳(東邦大・生物)
- [P33] 個体群成長率とプロセスの時空間変動性:岩礁潮間帯の固着生物群集における推移行列モデルを用いた解析. 金森由妃(北大・院・環境科学)、深谷肇一(統数研)、岩崎藍子(北大・院・環境科学)、野田隆史(北大・地球環境)
- [P36] 針葉樹林業地域における広葉樹林がカスミザクラの結実と交配に与える効果. 永光輝義、滝久智、菊地賢、加藤珠理(森林総研)
- [P38] A facultative mutualist increases the persistence of obligate mutualism. Gaku Takimoto (Toho University)
- [P39] 状態空間モデルによるアライグマの個体数推定と空間明示的な作物被害の許容密度の推定. 栗山武夫、長田 穰(東大・院・生物多様性)、浅田正彦(AMAC)、宮下 直(東大・院・生物多様性)
- [P40] 同所的に生息する二種の同属ダンゴムシに感染する繁殖操作の異なるボルバキア. 角拓人(岡山大)、

- 澤谷祐輝(岡山大)、三浦一芸(NARO)、○宮竹貴久(岡山大)
- [P41] Temporal chain reactions of indirect interactions initiated by intraspecific variation in an early-season herbivore. Shunsuke Utsumi (FSC, Hokkaido Univ.)
- [P42] 果実の摘果が生物的防除の効率に与える影響についての数理的考察. 池川雄亮、江副日出夫、難波利幸(大阪府大・院・理)
- [P43] 遺伝子と個体数分布に基づいたサドガエル個体群のネットワーク構造の推定. 山中美優(東大・院・農)、小林頼太(東環工専)、関谷國男(新潟大)、宮下直(東大・院・農)
- [P44] A stranger is tastier than a neighbor: Cannibalism in Mediterranean and desert populations of pit-building antlions. Ofer Ovadia and Erez David Barkae (Ben-Gurion University of the Negev)
- [P46] サンショウウオの共食いかトップダウン効果に及ぼす影響は変異する. 高津 邦夫(北大・院・環境科学)、岸田治(北大・北方圏 FSC)
- [P47] Multinomial mixture model によるオニヒトデ捕獲除去データからの駆除達成率の推定. 熊谷直喜(国環研)、山川英治・白木一太郎(沖縄県環境科学センター)、比嘉義視(恩納村漁協)、岡地賢(コーラルクエスト)
- [P48] 人為的攪乱に対する山菜の応答～収穫することで翌年のタケノコの生産は増す. 片山昇、岸田治、坂井励、早柏慎太郎、伊藤欣也、実吉智香子、浪花愛子、高橋 廣行、高木健太郎(北大・FSC)
- [P49] 気候と景観構造の地域差がもたらす高次捕食者サシバの繁殖適地の違い. 藤田 剛(東大・農)、東 淳樹(岩手大・農)、野中 純(オオタカ保護基金)、堺 義昭、堺 初美(印西サシバの会)、伊関文隆(希少生物研)、深澤圭太(国環研)、宮下直(東大・農)
- [P50] 農法と周辺景観が水田のアシナガグモ餌昆虫の季節動態に及ぼす影響. 筒井 優(東大・農)、田中幸一(農環研)、馬場友希(農環研)、宮下直(東大・農)
- [P51] 共生する植物-バクテリアでみられる野外集団間による変異. 鍵谷 進乃介(北大・環境科学院)、内海俊介(北大・北方生物圏 FSC)
- [P52] ハムシの餌選好性はどの形質と遺伝的に相関するか. 小野寺裕乃(北大・環境科学院)、内海俊介(北大・北方生物圏 FSC)
- [P54] 大きなオタマがいるとき、小さなオタマが捕食されやすいはなぜか? 山口 彩(北大・院・環境科学)、岸田治(北大・北方生物圏 FSC)
- [P55] 異質環境下におけるニホンジカの将来分布の予測: セルベースの状態空間モデルによる解析. 長田穰(東大・院・生物多様性)、浅田正彦(AMAC)、栗山武夫(東大・院・生物多様性)、横溝裕行(国環研)、宮下直(東大・院・生物多様性)
- [P56] 寄主植物を共有するホソオチョウとジャコウアゲハの出現タイミングが両種間相互作用に与える影響. 橋本洗哉、大串隆之(京大・生態研センター)

追悼：伊藤嘉昭さん

齊藤 隆（北海道大学フィールド科学センター、個体群生態学会会長）

私たちの世代にとって、伊藤さんはあこがれの研究者でした。私は、学部時代から、伊藤さんの著作で生態学の勉強をはじめました。そのなかで、1970年代後半にはすでに「古典」になっていた「比較生態学」に強く影響されました。ほんとうに素晴らし内容で、読んでいるときに鳥肌が立った感激をいまでも思い返すことができます。初めて読んだ時はどんな大家が著したものだろうと想像していたのですが、後に、伊藤さんが29歳の年に出版したもので、その原稿は「メーデー事件」に巻き込まれて休職中に書かれたものであったこと（詳しくは伊藤さんの自伝「楽しき挑戦」、海游舎を読んでください）を知り、改めて感動しました。伊藤さんはこの本の執筆のために約2000本の論文を読み込んだそうです。この勉強のお陰で、その後10年は論文を書くときに引用文献探しに困らなかった、とおっしゃっていました。

伊藤さんはこの著書のこと大きな失敗をしたと述べています。それは、オーストラリアの友人に「比較生態学」の内容を説明したとき、英語版の出版を勧められたが、実現できなかったことです。「英訳を一度始めたのに、なぜかやめてしまった」、「『多忙+さぼり』だと思う」と悔いておられます。その後、改訂版をもとに1978年に英語版を出版されましたが、時期を逃した、とおっしゃっていました。この「失敗」がよほど悔しかったので、30代で英語の本を書け」と私たちを何度も叱咤してくださいました。（伊藤さん、ごめんなさい。私はまだ英語の本格的な本を書けないでいます）

伊藤さんと個人的に親しくさせていただききっかけは、藤崎憲治さんと3人で、「動物たちの生き残り戦略」（1990年、NHKブックス）を書かせていただいたことでした。伊藤さんは、桐谷圭治さんと共著で「動物の数は何で定まるか」を1971年に出版されていました（NHKブックス）。この本で野ねずみの個体数の問題も丁寧に取り上げていただいております。

1980年代前半に大学院生活を過ごし、エゾヤチネズミを調べていた私には、視野を広げる格好の参考書でした。しかし、1980年代後半になるとその内容は急速に古び、改訂する必要があるだろうと私は勝手に思っていました。

そんな時に伊藤さんから突然電話があり、共著者として大改訂に加わるよう、誘っていただきました。（嬉しかった）共著者3人が定山溪の宿に缶詰となって、原稿の仕上げに取り組んだ合宿が懐かしく思い出されます。

私は当時、林野庁の付属研究機関である森林総合研究所（現在は国立研究開発法人）に勤めており、お役所的な職場の体質に息苦しさを感じていました。当時の研究所では、林野庁の方を向いて、研究とは言えないような林業試験を繰り返すことが普通で、エゾヤチネズミの生活史と個体数変動の関係を中心に研究を進めたかった私には、フラストレーションがたまることがしばしばでした。そんな時、伊藤さんの「もっとも基礎的なものをもっとも役に立つ」という言葉に何度も勇気づけられました。

また、1990年の8月に日本生態学会が横浜で第5回国際生態学会議（V INTECOL）を開催した時、伊藤さんは、プログラム委員を務められていたと思います（公式の役職は確認できませんが）。伊藤さんは、個体数変動に関するシンポジウムの枠を1つ用意してください、「好きなようにやれ」と私にオーガナイズを任せてくれました。私はその時34歳でしたが、国際会議のシンポジウムでの発表経験すらなく、オーガナイズの方法について予備知識は全くありませんでした。当時はこのようなことは普通で、若手にシンポのオーガナイズや雑誌の特集を丸投げし、背伸びをさせて育てていました。私はこのシンポジウムをきっかけに研究仲間を増やし、今も続くオスロ大学との共同研究を始めることができました。

INTECOLと前後して、私は、伊藤さんに、Researches on Population Ecology の編集委員に誘っていただきました。当時、編集委員会と学会の運営委員会は合同で開かれていて、三十代前半の駆け出しの研究者が、学会誌の編集ばかりでなく、学会の運営にまで自由に発言させていただくことができました。伊藤さんは、ご存じのように、歯に衣着せぬ発言で会議をリードします。その遠慮のない発言が会議の雰囲気を作り、「何でもあり」の賑やかな議論が広がり、そのまま懇親会に流れていくことが定番でした。私は、こ

の「何でもあり」の自由な時間と空間に学会のあり方を学びました。

良い研究を育むには「何でもあり」が大切だと思います。このところ、名古屋大学を活躍の場にしている方が、ノーベル賞を受賞されることが目立ちます。その理由を議論したことがあるのですが、受賞者の方が名古屋大学で過ごされた時期は、大学が規模を拡大させていた時期で、優秀な研究者が集まり、「何でもあり」の雰囲気で切磋琢磨していたことが重要ではなかったのか、という意見にまとまりました。個体群が増加している時は淘汰圧が弱く、多様性が高まるので、優れた形質も現れやすい、ということではないでしょうか。大阪市立大学理学部の草創期に優れた生態学者が活躍したのも似たような理由があったように思います。

個体群生態学会では、何でもありの議論は、合宿形式のシンポジウムでもよく見られました。合宿形式の大会は2007年まで続き、2008年の大会から現在の形式になりましたが、自由な議論の場は引き継がれていると思います。

伊藤さんは、論文を書くことに強烈なこだわりをもっていらっしやいました。結果の安

定性に自信が持てず、調査を重ねてから論文にしようかと迷っているときには、「おもしろい結果ならすぐに論文にしろ。間違っていたら、(前の自著を批判的に取りあげる) もう一本の論文を書けるじゃないか」とおっしゃっていました(あまりお勧めしませんが)。「研究したことはすぐに論文に書くクセをつけていて、調査したのに発表しなかったデータがほとんどない」と自伝で語られています。また、大学院生には、「勉強をするな、論文を書け」と言っていたそうです。それ以上勉強する必要のない伊藤さんならではの言葉だと思います。「常に in press がある」、「学会でも必ず発表をする」研究姿勢には頭が下がりました。

私たちは伊藤さんから多くのものいただきました。伊藤さんが私たちに残してくださったものを少しでも次世代に伝えていきたいと思います。

ご冥福を祈ります。

(注) この追悼文の一部は、日本生態学会のホームページに「会長からのメッセージ」として掲載されています。

旧友遠方に去る、悲しからずや

蟬山朋雄

1950年代半ばだったと思う。僕は農学部の大学院で鳥の野外研究を志し、生態学を独学で始めた頃だった。当時、東大には動物生態学の講座はなかったからだ。そこで、親父が戦後初めての欧米旅行で土産に買ってきてくれた三冊の本、Allee, et al. (1949) の膨大な教科書 *Principles of Animal Ecology*, Charles Elton (1927) の *Animal Ecology*, そして David Lack (1954) の *Natural Regulation of Animal Numbers* を一生懸命読んだ。ある時、生態学会東京支部の会合だったかと思うが、それに初めて行ってみた。概して退屈だったが、一つ興味を惹いた講演があった。題は覚えていないが、数種のアブラムシが個体数の増加につれて、寄主植物上で棲み分ける、という実験結果の考察だったかと思う。演者は痩せっぽちの、まだごく若い男だったが、結果そのものはさて置き、その理論的考察の鋭さに感銘を受けた。これが、

伊藤嘉昭との初の出会い、その後60年に亘る親交のきっかけとなる。

彼は、僕の研究室から都電で数駅の西ヶ原にある農技研で働いていたので、時々遊びに行ったものだ。かのメーデー事件で逮捕、投獄され、釈放後も無給だとのことだった。普通なら自信喪失し、世を恨むところだろうが、彼は不利な環境を逆に利用した。獄中、驚くほど沢山の文献を読み、自身の創造性を養ったのだ。その結果が、比較生態学となって現れる。著者弱冠29才。沢山の外国文献を読んで本を書いた人は少なくない。しかし、創造的思索に練り上げた人物は、僕の知る限り嘉昭ぐらいであろう。特に、動物の産数が「親による子の養育」の程度に反比例する、という考えは、David Lack による鳥の一腹卵数の進化と比肩さるべきものであった。Lack の *Natural Regulation* は1954年出版、比較生態学は1959年、わずか五年

の差であった。もし比較生態学が当時英文で出版されていたなら、国際的な評価を受けたに違いない。嘉昭はそれを知っていた。大分後に英訳が出たが、遅かりし。彼の無念さが良く分かる。しかし、一つ大きな違いがある。Lack は、四十雀科の鳥という実験個体群を手じかなワイタムの森に持って来て、しかも彼の理論を実証、検証する弟子が数代に亘っていたのである。僕自身、後年その一人となる。嘉昭にはその利点がなかった。しかし、彼は後に大学教授となる。彼が弟子に与えた薫陶は、彼自身の苦勞から直接生まれたものだったに違いない。僕は政府の研究所で終始したから人に教える義務がなく、その利点があったが、今になって後継ぎがないのは侘びしくもある。

1960年代初め、僕は四十雀の生態研究を続けるため渡英。五年後にカナダ天然資源省に研究職を見つけ、ニューブランズウィック州のフレデリクトン市に移住する。その途上、数ヶ月帰日した際、嘉昭との旧交が温まるが、やがて音信は途絶える。ところが、1970年、彼はアメリカシロヒトリの各地方種を採集するため北米にやってくる。しかも、僕の研究所の大先輩で、同種の研究に先鞭をつけた R. F. (フランク) Morris 博士と討論するために、フレデリクトンにやって来たのであった。しかも、フランク爺さんと大変馬が合ったのであろう、奥さんの綾子さん、一人息子の道夫君を呼び寄せ、長期滞在ということになった。そこで彼は、僕の研究室の一隅に居をかまえ、毎日顔を合わせる事になり、これがお互いを良く知り、親交をさらに深める機会となる。

彼ほど研究に精出だした男も少ない。獄中、文献読みに精出したのは分かるとして、その

後も研究に熱中する理由はどこにあったのだろうか。ある晩、ビールをのみながら駄弁ったとき、彼いみじくも曰く：「俺は、科学の発展に尽くす、なんていう高邁な精神はもたねー。ただ、あの男いい仕事しとる、と人に言ってもらいて一だけだ。」その後沖縄で、ウリミバエの根絶に成功したと聞いたとき、僕は、これは彼だったから出来た、と独りごちたものだ。つまり、彼の知識の豊富さが、実践以前の周到な用意を可能にした、と言う事である。それに比べ、僕自身カナダでトウヒシントメハマキの仕事に参加し、あれこれ防除方法の試験を見てきたが、その杜撰さに呆れていたところであった。

彼は、そもそも才能があり、それが彼の人一倍な思考活動の原動力であったことに間違いない。しかし、あの皮の下はすぐに骨じゃないかと思わせるような体つきにもかかわらず、これも人一倍だった物理的活動力はどこから出てきたのであろう？ 一つは彼の競争心であったかと思う。単なる競争ではない。彼は旧制高等専門学校からすぐ政府直属の研究所に入った。そこで、出身校、特に旧帝国大学偏重、不平等の悪習を嫌と言うほど見せ付けられたのであろう。酒を飲みながら、その不満がほとぼしることが間々あった。しかし後年、実績でその壁を破り、一旧帝大の教授となってからは、あの不満は大巾に減っていたことだろう。

彼はいつも物を考えていた。だから、最後までそうしていたに違いない。デカルト曰く：「我思考す。故に我あり。」この逆もまた真ならん：「彼もはや思考せず。故に彼亡し。」その前、もう一度一緒に飲んで云いたかった：「貴兄、いい仕事したぞ。」

伊藤さんとの懐かしき思い出

藤崎憲治（京都大学名誉教授、個体群生態学会元会長）

伊藤先生（後は親しみを込めて伊藤さんと言わせていただきます）が亡くなられたとの報を聞き、正直それほど大きな驚きは感じませんでした。ご高齢であることに加え、このところ学会などでお会いしても、往年の覇気はなく、年賀状も遅れたり、明らかに弱ってきておられる感じがしていたからです。

研究者は何人かの偉大な先達に影響されながら、研究を始め、そして成長していくものです。私にとって伊藤さんはその一人でした。伊藤さんをはじめて拝見したのは京都大学昆虫学研究室でのローカルなセミナーでした。1968年ころだったのでしょうか。何をしゃべられたのかはほとんど記憶に残っていませんが、狭いゼミ室に響き渡る、そのとて

つもなく大きな“悪声”に度肝を抜かれたことだけは鮮烈に覚えています。

それから間もなく、大学では全共闘運動が始まりました。すべてにわたって改革が声高に叫ばれていました。私は同期の中村浩二さんとともに、東京の西ヶ原にあった農水省農業技術研究所まで伊藤さんに会いに出かけました。生意気にも日本応用動物昆虫学会などの学会改革を訴えるためでした。それでも伊藤さんは私たちの話に耳を傾けてくれました。話を聞いた後、「どうやら君たちはトロツキストではなさそうだな」と伊藤さんは言いました。とんでもない過激派が押し掛けてくるとも思っていたに違いありません。さすがに、戦後間もなくの民主主義科学者協会（いわゆる民科）の論客の一人であり、メーデー事件において逮捕・勾留されたつわものですから、全く動揺した感じはありませんでした。いずれにしても、これが2度目の出会いでした。

政治の季節も過ぎ去り、遅ればせながら卒論に取り組みました。テーマは昆虫の集合性でした。昆虫の集合性に関する私見について長文の手紙をしたため、伊藤さんに送りました。すると間もなく、伊藤さんからこれまた長い返事が返って来ました。いろんなことを教えていただきました。多忙なオーソリティーからの親切な手紙を貰ったことをとても嬉しく思いました。駆け出しの一介の学生の疑問に対して懇切丁寧に答える、その教育的姿勢に感動しました。

私は大学院に進学し、昆虫の集合性に関する研究から交尾戦略に関する研究にテーマはシフトしていきました。ホオズキカメムシでハレムという一夫多妻的な配偶システムを発見した時、伊藤さんはすぐに『比較生態学』（第2版、岩波書店、1978年）に紹介してくれました。その当時、本書は生態学を志す若い学生にとってバイブルのような名著でした。「子にとっての餌の得やすさ」という縦糸で、コンパラティブに動物の繁殖戦略や生活史戦略を織りなす、その斬新さと壮大さに感動しました。大変な労作で、その豊富な勉強量に圧倒されました。ずっとそれ以前の1963年に出版された『動物生態学入門』（古今書院）も、個体群生態学の格好の入門書として、ぼろぼろになるまで読み返したものです。桐谷圭治さんとの共著『動物の数は何で決まるか』（NHKブックス、1971年）も個体群生態学の面白さを語る普及書として大いに感化されました。1972年出版の『アメリ

カシロヒトリ』（伊藤嘉昭編著、中公新書）も、アメリカシロヒトリの日本における侵入定着と適応に関する、当時の第一線の昆虫学者による共同研究の成果をまとめた、きわめてインプレッシブなものでした。進化的視点を持ちながら昆虫の生態研究を行うことの面白さと、共同研究の重要性を学びました。

伊藤さんは沖縄が本土復帰した1972年からは沖縄県農業試験場に移りました。当時京都大学にいた村井実さんも一緒でした。特殊病害虫に指定されていたウリミバエとミカンコミバエの根絶事業のリーダーとして、この世界的な一大プロジェクトを指揮するためでした。このプロジェクトは幾多の困難を乗り越えながら、「基礎的なことがもっとも応用的である」という信念のもとに、20年余りの歳月を費やしながらも根絶に成功しました。その過程で多くの基礎から応用までの優れた研究が展開され、沖縄の多くの研究者が育ちました。その間の経緯は、『一生態学徒の農学遍歴』（蒼樹書房、1975年）や『虫を放して虫を滅ぼす』（中公新書、1980年）などにまとめられているので、ご存知の方も多いに違いありません。それらはミバエ根絶事業に携わった多くの青春群像が登場するプロジェクト研究のドキュメンタリーであるとは言え、伊藤さんの強烈な主観による、ほとんど私小説であると私は感じました。

私は1978年に伊藤さんが名古屋大学に、村井実さんが九州大学に移った翌年の1979年に、沖縄県農業試験場に就職することになりました。サトウキビ害虫の生態に関する基礎研究を行うことが私のミッションでした。沖縄に赴任する直前に名古屋大学にあいさつに行き、当時在籍していた中筋房夫さんも一緒に、鳥料理屋で一席設けてもらいました。私が沖縄に行くことを意気を感じた伊藤さんから大いに激励されたものです。

私が沖縄にいた11年余りの間、伊藤さんはしばしば顔を見せました。その度に愉快で楽しい酒を飲み交わしたものです。W. D. ハミルトン博士やW. エバーハード博士などの超有名人を連れて来たこともありました。ハミルトン博士が農業試験場で行った講演は、なんと性の進化仮説であるパラサイト説に関するものでありました。フィールドでハチの観察をしたいというので、皆さんを車で案内したりもしました。もしものことがあってはと大変緊張したことを覚えています。私が当時の科学技術庁の中期在外研究員としてカリフォルニア大学デービス校のH. ディ

ンゲル博士（動物の移動研究の大家）の研究室に行くことが決まった時は、どこの研究室の誰にはぜひ会ってくるようにとか、どのあたりにはうまいレストランがあるといった、それは細かい情報を教えてくれました。独特な親切さがある人でした。

伊藤さんが名古屋大学に移った直後の1980年には、『動物の個体群と群集』（東海大学出版会）という教科書を当時私の研究室の室長であった法橋信彦さんも含めて3人で出版しました。この本は発行部数が5000部をゆうに超え、生態学の教科書としてはベストセラーになったようです。また、1990年には斎藤隆さんも含めて3人で『動物たちの生き残り戦略』（NHKブックス）を出版しました。私は岡山大学に移ったばかりでした。本の最後のページには3人の顔写真が載っていました。ある口の悪い生態学者は、「まるでやくの売人たちみたいだ」と言っていました。もしそうなら伊藤さんは差し詰め売人の“元締め”といったところでしょう。原稿の読み合わせは3人で北海道定山溪の温泉宿でやりました。温泉好きの伊藤さんならではの話ですが、楽しい思い出となりました。

伊藤さんは名古屋大学ではチビアシナガバチにおける多雌創設の進化モデルの提唱など、社会生物学の研究に重きを置くと同時に、たくさんの優れたお弟子さんを育てました。当時、伊藤さんが個体群生態学から社会生物学に学問分野をシフトさせていったことに対してあまり良く思わない個体群生態学者もいました。しかし、社会生物学の学問的魅力もさることながら、高齢化による肉体的な衰えにより、ハードな野外調査を伴う個体群生態学から観察などによってデータが取れる社会性昆虫研究への転換を余儀なくされたのではと、私は思っています。伊藤さんは、名古屋大学退職後は沖縄大学に再就職しました。再び沖縄の地を踏んだわけです。米軍基地の存在に異を唱え、沖縄本島北部（やんばる）の自然保護を訴えることを通し

て、沖縄の進歩的知識人たちとの交流も盛んでした。狭い専門の枠に閉じこまらずに、科学者として社会的責任を果たそうとした、その姿勢は立派だと思います。単に沖縄に対する米軍や日本政府の理不尽さを非難するだけでなく、時として沖縄の人たちに対する苦言もはばからない言説に、伊藤さんの真髓がありました。いま沖縄はそのアイデンティティを回復する歴史的に重要な時期にあります。このような時期に伊藤さんが逝ってしまったのは、いかにも惜しい気がしてなりません。

個体群生態学会の会長を1983～1984年、1989～1991年の2期、務められたことでも分かるように、伊藤さんは個体群生態学会の発展と国際化のために大いに尽力されました。その貢献は測り知れないものがあります。私が編集長をやっているとき、著名な生態学者のP. ターチン博士を個体群シンポ（1995年）に招聘したことがありました。その講演内容を*Res. Popul. Ecol.*に掲載したい旨をお願いし、寄稿してもらいました。ところが、その査読を行った嶋田正和さんから他の雑誌に書いたものとほとんど同じだから書き直して欲しいという注文がきました。私もそれを認めました。それを知った伊藤さんから「講演してもらっただけでもありがたいのに、君たちは偉大な研究者に何ということをお願いするのだ！」と、激しい叱責の電話をいただきました。しかし、フェアであるべき編集長として、私はそれを容認するわけにはいきませんでした。ともあれ、幸運なことに、伊藤さんに怒られたのは、後にも先にもその時だけでした。

伊藤さんはとてもあくが強く強烈な個性の持ち主でしたが、不思議なやさしさと親切さを兼ね備えていた人でした。若い研究者に対する良きアジテーターでした。この偉大な先達と時代を共有できたことを、私は幸運に思っています。心からご冥福をお祈りします。

伊藤さん、たくさんの激励の言葉を有難うございました

椿 宜高（京都大学名誉教授）

伊藤嘉昭さんの死を悼み、深い悲しみとともに別れの挨拶を捧げます。

伊藤さんは、時代によって農環研、沖縄農

試、名古屋大学とホームグラウンドを変えつつ、世界中を舞台に活躍されました。それぞれの場で重要な仕事をされてきましたが、私がご

一緒させて頂いた名古屋大学での10年余りの活動に思いを馳せると、楽しくも刺激的だった時代のことが鮮やかによみがえります。ここでは、伊藤さんの常套句(あるいは口癖)のいくつかをピックアップし、それらがどのような背景から生まれたのか、思い出しながら書き綴っていきたいと思います。私にとっては、伊藤さんの言葉こそが一番の思い出になっているからです。名古屋時代の雰囲気、伊藤さんの人となりを少しでも感じとっていただけると幸いです。

まず、紹介すべきは「俺は大学を出ていない」という台詞です。伊藤さんが高等教育を受けたのは「東京農林専門学校」ですので、確かに戦前は大学ではないのですが、東京農林専門学校は戦後の改革で「東京農工大」になったので、大学卒業と同じ扱いで良いはずですが、しかし、伊藤さんの主張はそういう問題ではなく、戦後の混乱で、ロクな大学教育を受けることができなかったという意味です。伊藤さんにとって、この台詞は「自分は、大学教育は受けなくても、英語で論文を書き、生態学の教科書も書いている。今の学生たちはちゃんと英語も数学も教えてもらっているのだから、研究ができて当然だろう」との裏返しの意味でした。しかし、ちょっと違う意味で使われることもありました。ゼミや講義中の板書で、伊藤さんはよく漢字や英語のスペルを間違えるのです。学生に指摘されると、この言葉が必ず出てくるので、対処に困りました。学生の感想は「農学部で漢字は教えてくれないですよ...」

次は「包括適応度」。名大の害虫学研究室では、国際的な社会生物学の潮流を取り入れ、さかんに社会性昆虫の研究を盛んにやっていました。おもな研究内容は、ハチやアリで自分は繁殖しないワーカーがなぜ進化したのかを説明する、ハミルトンの血縁選択説の検討です。伊藤さんは、この言葉がいたく気に入ったようで、あらゆる親切行動の説明に拡大解釈して使っていました。当時、害虫学研究室は特定研究「生物の適応戦略と社会構造」のコア研究室になっていましたが、その時期は海外から多くの研究者を受け入れていました。その世話が結構大変で、アパート探し、子供の保育所、入国手続き、文化活動サークルの案内など、大忙しでしたが、二人で「これも包括適応度のため」など、不思議な合言葉で納得し(励まし)あっていたことを思い出します。

三つ目は「外国雑誌」。伊藤さんが名古屋

に赴任したころ、英語の論文を書く研究者はそれなりにいたのですが、海外の雑誌にじゃんじゃん投稿する雰囲気ではありませんでした。当時も今もですが、我が国の生態学の英文雑誌としては、**Researches on Population Ecology**が頂点にあり、この雑誌に掲載されることが暗黙の目標になっていたのかも知れません。よほどの内容でないとイギリスやアメリカの雑誌に投稿しないような雰囲気でした。伊藤さんはこのことを嘆いて「生態学会の進路」と題する論説を日本生態学会誌に書いています。そして、伊藤さんが全国の若手が集まる研究会や学会の後の懇親会で、「外国雑誌」、「外国雑誌」とアジリまくった結果、日本の生態学の雰囲気は変化していったのだと思います。もちろん、名大害虫研が多くの論文を海外の雑誌で発表し、先頭を切って研究発表の場を拡大したことも大きいはずですが。

最後に「ああ、いいこと書いているなあ」の台詞。伊藤さんは枕元にご自分の本を置いて寝たそうです。なかなか寝付けない時は、自分の本を読むと「ああ、名著だ」と感動して、ぐっすり眠れるのだとか。本意は、「本を書け。座右の書にできるような自分の本を」という叱咤激励なのではと思いますが、伊藤さんのナルシスト性がいかんなく発揮された台詞です。

他にも、記しておきたい伊藤語録はいくつもあります。問題発言もありますので、ほとんど解説なしで幾つか並べるだけにします。伊藤さんと一緒に飲んだ事がある人には、きっと「ああ、あれか」と思い出してもらえる懐かしい言葉でしょう。夏休み恒例の山歩きで虫の群れを見つけては「〇〇が大発生しているぞ」、飲んだ時の下ネタ「オーリアンズの巨大な〇〇〇〇」、名大キャンパスで8月にアブラセミの屍体を見つけては「セミが暑さで死んでいる」、人の失敗談を聞いて「あいつは悲劇の主人公」、チョウやタマムシなどを見ては「キレイキレイな〇〇」、などなど。

伊藤さんの「楽しき挑戦、型破り生態学50年(海遊舎)」には若い人へのメッセージがたくさん盛り込まれているので、一読をお勧めします。敢えてひとことで帯をと言われれば「少年よ、ナルシストであれ、私のように」でしょうか。伊藤さん、たくさんの言葉をありがとうございました。また、楽しい時期を、伊藤さんにとっても一番いい時期を一緒に過ごさせていただいて、本当に感謝していま

す。どうか、安らかに眠りください。

伊藤 嘉昭 先生の思い出

嶋田 正和 (東大・総合文化・広域)

「イトーカショー」という不思議な名前は、生態学者を目指して京大理学部に入って早い段階で耳にした。きっかけは『比較生態学』(初版、岩波書店、1959)である。農学部の剣道部先輩の下宿が近かったので、生態学の研究の話して、この本が話題となった。「これはすごい本なんだ」と興奮気味に語る先輩に促されて、『比較生態学』を買い求めた。

なるほど、すごいの意味が分かった。まずなにより、本全体を通して背骨としての明確な哲学がある。そして引用文献が豊富であり、古今東西の文献を網羅してその上に明瞭な道筋をつけるとの信条が伺える。「まえがき」に「個体群生態学と動物社会学の中で論争的なくつかの問題を、比較の方法によって整理しようと試みたものである」とある。「まえがき」で Comparative の手法について Konrad Lorenz の言葉を引き、「比較とは、単にある形質の現れ方をたくさん種についてならべてみることでなくて、その発展の過程を進化の視点から明らかにしてゆくことである」との大方針に従って、1章：繁殖と死亡、2章：個体数の変動、3章：縄張り制、4章：順位制、5章：昆虫の社会、6章：動物社会の統合と人間への道、を展開する。個体数動態論と進化生態学と社会生物学までを含めた地平を見据えたこの本は、『Sociobiology: New Synthesis』(E. O. Wilson, Belknap/Harvard, 1975)に先んじること16年前の刊行であり、世界に誇るべき第一級の名著である

その後、私は内田俊郎先生の勧めで米国 Purdue 大学から帰国された藤井宏一先生のラボ立ち上げに参画すべく、大学院から筑波大学に移った。その頃に刊行された『比較生態学 第2版』(岩波書店、1978年)は輪読会で批判的に読んだ。第2版では、R. H. MacArthur の r - K -選択説と『比較生態学』の見方を対比したもので、 r - K -選択説の正しい面は『比較生態学』(初版)がすでに説明したものであり、その説の誤っている点は『比較生態学』の方が正しいとの、一刀両断である。生涯を「権威に対して挑戦し続けた

研究者」の面目躍如の感ありか。「貧栄養のきびしい環境では親による子の保護がより進化する」という主張は、大卵少産・親による子の保護(K -選択説には合わない) vs. 小卵多産の比較法と相まって、MacArthur には欠けている重要な視点である。

実物の伊藤嘉昭先生に間近でお目にかかったのは、学会参加の折であった。特に印象に残ったのは、1983年11月に名古屋大学農学部害虫学教室が当番となって開催した第11回個体群生態学シンポジウム(シンポI: 配偶戦略、シンポII: 同種内の協力と攻撃)である。多数の院生や若手研究者が集まり、血縁選択説と利他行動による社会行動を討論したすばらしいシンポだった。その中で、オールバックのヘアスタイルで、ヤギ髭を生やし、痩せて背が高くひよろひよろとした骸骨のような動きと甲高くしゃがれた声の風貌から強烈なオーラを放つ先生がいらっしやっした。「これが伝説のあのイトーカショーか！」博物館で初めて生きた化石に出会った驚きに相通じる瞬間であった。

やがて、私が東大駒場に助手で赴任すると、まもなく伊藤先生は個体群生態学会会長に就任され、私に幹事長を務めるようにとの依頼が来た。怖いもの見たさに幹事長を引き受け、2年間お勤めを果たしたが、意外と優しく人情味のある先生であることが折に触れて分かった。私が東大に就職して論文があまり出なかった時期に、論文を国際誌に出すことの重要さをさりげなく注意して下さったのは、若手に対する親心だったと思う。

伊藤先生と密接にかかわったもう一つのできごとは、『動物生態学』(伊藤嘉昭・山村則男・嶋田正和、蒼樹書房、1992)、『動物生態学—新版』(嶋田正和・山村則男・粕谷英一・伊藤嘉昭、海游社、2005)の刊行である。この本は大学院生から若手研究者を読者層に定め、個体群動態論から進化生態学、社会生物学、群集生態学、数理モデルの解説に至るまで、余すところなく解説した専門の教科書である。初版を執筆する時の伊藤先生の馬力はすさまじく、私や山村さんを激励し原稿

を催促したことで、構想から4年で刊行にたどり着けた。ゲラが出た時には内容のレベルの高さに伊藤先生はたいへん満足していた。刊行された直後から、学界でも「すごい教科書だ」と評判になり、あっという間に6000部を売り上げた。新版(第2版)のときは、私はもう教授になっていたので、伊藤先生は「嶋田に任すから海游社と相談して新版を編集してくれ」との依頼で、ご自身は4番目の著者に退かれた。15章:メタ個体群(嶋田)、16章:性的対立(粕谷氏)、17章:生物多様性と生態系機能(嶋田)を加筆して現代化し、新版も最初の1年で1500部を売ったので、伊藤先生に恩返しができたと思う。

伊藤先生のチビアシナガバチ (*Ropalidia* 属)

の多女王制の進化の研究は、私の進化生態学の授業でも毎年紹介している。面白い材料であり、この研究で M. J. West-Eberhard や R. Gadagkar との交流も盛んだった。沖縄大学教授に異動されても、ときおり論文の別刷りを頂いた。琉球の自然についての保護活動の論文で、精力的に研究に励む姿勢に頭が下がる思いだった。南の国の風土に合うおおらかさと熱い情熱を、終生持ち続けた研究者だった。最近では学会でもお目にかかる機会がなくなっただけと思ったら、突然の訃報を受けた。挑戦する研究者の姿を後進に訓えて旅立たれたのだと思う。沖縄の空の上で焼酎を傾けている姿が目浮かぶようだ。 合掌。

伊藤嘉昭さんと2つの考え方

粕谷英一 (九州大学理学部生物学教室 (生態学研究室))

伊藤嘉昭さん(以下、伊藤さん)と私は、公式な面で言えば、大学・大学院での指導教員と学生・院生という関係だった。だが、その時期はあまり長くない。私が学部4年生の途中からD3の秋までの約5年(1978年~1983年)だった。長くはない期間だったが、このときの間人関係が私を研究者にした。指導教員と指導を受ける院生や学生という関係として見たとき、伊藤さんと私の関係はおそらく(当時の基準でも今の基準でも)変わったものだった(大学院生と指導教官のあいだで雑誌上で論争したこと[伊藤(1982a,b)、粕谷(1982)]や、文章作成に大きく寄与した論文の共著者になるのを伊藤さんが断り粕谷の単著で投稿するようになったことがあった)。伊藤さんとの研究者としてのつきあいはその後長く続いた。なお、「伊藤先生」と私が呼ぶのを、伊藤さんはあまり好まないと思うので、ここでは、「伊藤さん」としている。

この時期は、(今の呼び方でいえば)進化生物学の考え方と情報が、(今で言う)行動生態学を先頭に一気に日本に流れ込んできた、激しい変化のときだった。それまでの進化に対する基本的な思考をやや乱暴に概括すれば、「種の利益」ということになると思う。基本的な考え方が大きくちがうので、どう解決や折り合いをつけて、どう思考を確立するかは、いやでもそれぞれの研究者が迫ら

れた。この状況を、岸由二氏は、「鎖国」と「黒船」にたとえている(たとえば、岸、1991)¹。

基本的な考え方の激変だけでも大きな問題だが、それに加えて多くの情報が一気に流れ込んで来たので、生態学(あるいは進化生物学)でその時点でまだ解決されていないいわば最先端の問題と、すでに解決されているがその内容を日本にいる研究者はよく知らない問題とが、混在していた。いわば、生態学や進化生物学の発展の時間軸に沿ってみると、行ったり戻ったり、考えながらまた大きく戻ったり、といったことを繰り返していたことになる。後から見ればそのように整理できるが、その時期に内から見ると、混沌としているように見えた。

伊藤さんは流れ込んでくる進化生物学の基本的な考え方に対して積極的で、エネルギーであり、その周囲は私も含めて強い影響を受けた。当初、適応進化の基本的な考え方に対して批判的だがその内容は理解しな

¹ ほぼこの時期に個体群生態学会では定光寺や熱川でのシンポジウムに関連した話題を取り上げている。私自身もとくに熱川のシンポジウム(1987)で総括的な話をする機会をいただいた。また、まとまった文章としては粕谷(1992)で議論している。

ければいけないというスタンスだった伊藤さんは、次第に支持し推進する色合いが濃くなっていった。その変化の過程はゆるやかで漸進的ではなく、激しく振れながら理解が進んでいった。

私にとっては、後から考えてみると、実はこの時期に以下のことを学んだのだと思う。他の生物との関係の中で生きていることを生態学としては当然の大前提だとすれば、学んだことは2つにまとめることができるだろう。

1つは、個体は単独の個体として存在するわけではなく個体群の構成員として存在することである。これは、**population thinking**と呼ぶことができるだろう。他個体がまわりにいるから個体間の相互作用や個体間関係が生じるとともに、個体群を構成する多くの個体はみな同じではなく互いに異なる可能性がある。この時期には、個体の条件戦略という概念がまだ確立しておらず、意思決定がいわゆる高等な動物に限られるという思い込みも少なからず存在した。条件戦略のなかの戦術の間のちがいと異なる戦略間のちがいの整理は不十分で、しばしば混乱のもととなっていた。もっとも **Maynard Smith (1982)** の戦略の定義にも類似の弱点はあったので、決して”日本的”な問題ではなかった。

もう1つは、生物の性質は進化の産物であるという捉え方であり、とくに適応進化の力の重要性である。こちらは、**selection thinking**と呼ぶことができるだろう。だが、”黒船” 当時は、どのような選択が働けばどのような性質が進化して、その結果どういう状態が観察されると予測されるかは、自明からはほど遠かった。1つの個体群内にある戦略の個体と別の戦略の個体がいる状況で、戦略間の適応度の比較をするべきところで、すべての個体がある戦略をとっている個体群と

すべての個体が別の戦略をとっている個体群で適応度を比較してしまうような誤りも見られた。

同種の他の個体との相互作用の進化では、相手との遺伝的相関が重要な役割を果たす。遺伝的相関は、いまではたとえば血縁選択の **Hamilton** のルール ($rB > C$) における血縁度として基本的な概念の1つになっている。しかし、血縁選択は難解で誤解も多かった。後の時点から見てみれば、他個体と同じ遺伝子を持つ確率全体と祖先を共有するために同じ遺伝子を持つ確率が区別できていないことによる面が大きかった。血縁度は前者ではなく後者に注目した量である。この2つの区別が整然とできないといろいろな間違いの原因となる (**Dawkins, 1979** 参照)。

この2つの思考法は、生態学にとってはある意味で当然のものであり、今も、また今後も、生物学にとって重要だろうと思う。

引用文献

Dawkins, R. (1979) Zeitschrift für Tierpsychologie, 51: 184–200.

伊藤嘉昭 (1982a) 生物科学、34:85–91.

伊藤嘉昭 (1982b) 生物科学、34:145–149.

粕谷英一 (1982) 生物科学、34:169–174.

粕谷英一 (1992) 行動生態学の適応論. 講座・進化7、生態学からみた進化. 東京大学出版会.

岸由二 (1991) 現代日本における進化的理解の転換史. 講座・進化2 進化論と社会、東京大学出版会.

Maynard Smith, J. (1982) Evolution and the theory of games. Cambridge University Press.

「理論は滅びても事実は残る」

辻 和希 (琉球大学農学部)

伊藤嘉昭さんが亡くなった。奇しくも沖縄が本土復帰した日と同じ5月15日だった。伊藤さんには数々の功績がある。ミバエ根絶事業を成功に導き、沖縄を昆虫生態学の世界の拠点にしたこと。個体群生態学と行動生態学の先導者としてそれらを日本に広めたこ

と。英文の教科書を書き日本の生態学と昆虫学の存在感を世界に示したこと。多くの研究者を育てたこと。これらはすべて誇張のない事実だがすでに他で書かれていることなのでここでは触れない。

人を動かす力。本を書き続ける熱意。逆

境下での次世代研究者の育成など、私には到底真似できない力を伊藤さんは沢山持っていた。そんな私がすべき恩返しは師が示した学問的文化を次世代に継承することだと思う。学問と書かなかったのは、学問に対する姿勢も含め後の世代に伝えるべきことが沢山あるからだ。そこで、肯定的であれ批判的であれ、恩師の学問的文化にまつわる自問自答の一部を以下に列記したい。

伊藤さんは沖縄県農業試験場から名古屋大学に職場を移したとき、主な研究テーマを害虫の個体群生態学から社会性カリバチを中心とした行動生態学に変えた。影響力のある氏の動きを追従するかのようになり、やがて日本の動物生態学界のトピックもその方向にシフトした。1970年代末から80年代にかけてである。しかし、伊藤さんの名古屋大学での授業は、着任時から退職時まで一貫して、氏が得意とする個体群と群集の生態学が約8割、残りの2割が行動生態学だった。院生がテーマとして選択することが多かった行動生態学は「一緒に勉強しよう」という雰囲気だった。セミナーでは教員も学生も完全に平等。逆にいえば、学生・初心者たりとも容赦はない（おそらく教員は学部生にはかなり手加減していたと今では思うが）。鈍いがゆえ打たれ強かった私にとってこれは良かったが、学生の中には傷ついた人もいただろう。今の教育現場ではこのような厳しさはメンタルケアとの折り合いが大問題になるが、当時の名古屋大学のセミナーでは平等原則でお構いなしだった。逆に院生やオバードクターのつっこみに教員が窮するような場面もあった。このような学問的に健全な雰囲気を生で伝えてくれた恩師たちに感謝する。

一方、伊藤さんのフォロワーだった日本の大学教員たちの振る舞いにはこれと大きく違うものがあつたようだ。80年代当時の流行を反映し、大学の動物生態学の授業でも、次第に個体群生態学が行動生態学に置き換わっていった。教員の世代交代でそうなつたのならまだ理解可能だが、実際はそうではなかった。驚くべきことに過去に個体群や群集を教えていた教員が、研究テーマを変えたとなん授業でも行動生態学しか教えなくなったケースが稀ではないのだ。講義では広く体系的に教えるのが当たり前と思う。専門を変えたこの手の人は造詣が深い個体群も行動も教えるべきと思うが、そうしないのはどうしたことか。さらに、行動生態学に代わり、保全生態学や生態系生態学のようなマクロ生態

学がトレンドになつた現在では、今度は行動生態学が大学の講義から消えつつあるようだ。私が不思議に思うのは、過去に専門を変えたことがある大学教員が、まるで過去を隠蔽するかのようになり教育現場で振る舞うはなぜなのかである。もしトーマス・クーンが日本の生態学を観察したらパラダイムシフト説の実例としたらどうだろうか。いうまでもなくこれでは学問のより高度な体系化や深化は望めない。だからか、日本の学生の視野がいつの時代も狭いといわれるのは、ニュートンが「巨人の肩に乗る」と比喻したように、過去の体系を批判的に継承せねば、巨人の正体である体系的知識は構築できない。流行の変化で日本の教員が「改宗」してしまう理由に関し、実は私はある仮説を持つが、それはまたの機会で書くことにしよう。

伊藤さんは論文も多作である。しかし、ハチの行動生態を始めた後の論文などはとくに、弟子の目からみてもかなり雑で、まさに「小卵多産」である。業界の標準的な教科書を多数書くほど博識なのに、なぜそれが自身の論文に減多に活かされなかったのか。これについては以前に少し書いた（辻 2004、動物行動学会ニューズレター43:27-29）が、もう少し掘り下げたい。

伊藤さんの独創性あるいは学問的に目指したところは何だったか。文献学であった「比較生態学」でも、自身の探検談が中心の「カリバチの社会進化」にしても、結局のところの関心は系統発生すなわち刷新の歴史的順序だった。比較生態学（初版）を要約するならば、「動物の個体群動態から社会秩序に至るまで親による子の保護の進化がその状態を決定する重要要素である」となる。このデビッド・ラックとリチャード・アレクサンダーのあいだのような学説の裏に存在するダイナミクスに対する伊藤さんの興味は個体群生態学では比較的強く、行動生態学ではたぶん当初の今西錦司の影響もあつてか弱かった。「順序がわかればメカニズムは自ずと分かる」という常識的な感覚があつたのではないかと思うがどうだろうか。

伊藤さんの教科書は、とくに単著のものは、当時の世界の動物生態学のテーマ・トピックにおける事例や方法論の紹介が中心であり、個々の章・トピックの中では論理的ストーリーはあるものの、テーマ間を繋ぐ視点を多分に欠いていた。比較生態学では「親による子の保護」が連結概念だったが、ウィルソンの「社会生物学」のような自然選択理論による

体系化にはほど遠い。しかし、逆にこれが私には良い反面教師的な教育的効果を生んだ。トピックの間のギャップに悩み、それを埋めるロジックを探そうと常に考える癖がついたからだ。生活史戦略理論で社会進化から外来種問題までとらえ直そう (Tsuji & Tsuji 1996 *Oikos*, Nakamaru et al. 2014 *PLoS ONE*)、分子からメタ群集に至る階層間の相互作用を単一のダイナミクスで捉えよう (Tsuji 2013 *Biol. Let.*, Dobata & Tsuji 2012 *PRSLB*) など、今進めている研究のコンセプトはどれも比較生態学の消化不良感からきているといっても過言でない。隙だらけの恩師に感謝。

伊藤さんには「教科書を書け」といわれ続けたが単著では未だ実現できていない。比較生態学のような **bibliographical monograph** は書くのも大変だが、事典としては便利なものの通して読もうとすると飽きてしまうので自分自身で書きたくはない。短く体系がわかるものになりたい。すなわち、基礎から積み上げた上で現状の学問を薄くても広く展望でき、かつ事項間の論理的繋がりが万人に分かりやすい。そんなものになりたい。頁数の制約から決して満足できたものではないが、岩波の「進化学6 行動・生態の進化」の2章 (辻 2006)、はそれを目指したものだ。しかし、伊藤さんには「はっきりいって理論オーバー」と辛口評価をバツサリされたのだった。マスター・ヨーダの叱咤に感謝。ダース・ベイターになってやろうかと思ったりもしたが...

この言葉からもわかるように、伊藤さんは理論を軸にした体系化には一歩距離をおく持論を持っていた。よく口にした言葉は「理論は新しいものにとって代わられる運命にあるが事実は残る」だった。「雑でもいいからデータは早く論文にする」という姿勢もここからきたのだろう。院生時代の私は、科学哲学の本で読んだことがある観察事実の理論依存性・要するに理論があるとその予測をテストするようなデータが他のデータより集まりがちで、データもその理論の可否を判断するために収集法や集約法がデザインされる傾向があるので、目的外の理論の中立的テストには向かない・という考えから伊藤さんのこの姿勢にはやや懐疑的だった。仮

説のない記載的論文というのもあまり好きではなかった。しかし現状を見る限り伊藤さんの「理論は滅びても事実は残る」という考え方が先端分野においても圧倒的に市民権を得ている。今や既存のビッグデータによるメタ解析が生態学や進化生物学の最前線では流行で、データ論文というのもあちこちの雑誌で始まっているのだ。師匠の識見に敬服。

伊藤さんは一線級の外国人研究者を多数日本に招き、日本の生態学の国際化に励んだ。これはメーデー事件の被告となり若い時に海外渡航の機会を逸したことへの猛烈な後悔からきている。とくに若手を外国人研究者に紹介することに力を注いだ。私はこの恩恵に最大限預かった。心より感謝している。しかし、私は日本の生態学の「開国」はいぜん形だけだと思っていて、場合によっては伊藤さんが若手だった頃・色々な意味で研究スクールの世界が狭かった時代・より今の状況は厳しく、放っておくと今の若手は国際的に孤立してしまうのではと危惧している。

「真の開国」に向けた努力。これが日本の生態学において私が師から発展的に受け継ぐべき責務であると考えている。恩師に約束。

前述のように、学問上の問題に限らず、ばらばらに存在するようにみえる事柄の間の繋がりの意識する習慣を養ったのが、伊藤先生に師事したことの最大の恩恵である。実は、私は上に羅列した伊藤さんにもつわるさまざま事柄の「繋がり」を理解するための軸(ピボット)に関する仮説についても暖めていて、いずれどこかで書きたいと思っている。

ピボットといえば、伊藤さんの比較生態学(第2版)には「生存曲線を種間比較するときには繁殖開始齢を原点(ピボット)とすべき」という新規メッセージがあった。

表現型レベルの現象は我々の五感に直接訴えるゆえ、個体群生態学を含む集団生物学は、生物学の分野間あるいは生物学と社会を繋ぐ結節点(ピボット)となるべきであろう。そして私の生態学の原点(ピボット)も学部時代に伊藤さんから受けた昆虫生態学の講義だった。本当にありがとうございました。恩師に合掌。

事務局報告

内海俊介 (事務長)

●2014 年度秋運営委員会兼理事会報告

日時：2014 年 10 月 10 日 (金) 13:00 - 16:00

場所：筑波大学 大学会館

参加者：石原、近藤、佐藤、瀧本、辻、椿、西田、松浦、宮竹、齊藤、岸田、内海、徳永 (2014 年度大会実行委員長)、山村 (2014 年度大会実行委員長)

委任状：巖佐、津田、仲岡、宮竹、吉田

1：報告事項

(1) 事務局

- ・学会MLの運用について現行通り行うことが報告された。
- ・第9回奨励賞の公告がなされ、審査委員のメンバーが確定したことが報告された。

(3) PE 編集

- ・佐藤編集長より、順調に編集が進んでいることが確認された。知的財産に関する報告がされた。

(4) 会報編集

- ・石原編集担当委員より、今年号が発行されたことが報告された。石原編集長の任期が終了し、次号より津田委員が編集長を引き継ぐことが確認された。

(5) 2014 年度つくば大会

- ・徳永大会実行委員長より、順調に準備が進み開催に至っていることが報告された。無用な印刷を避けることによって財政的に問題がないことが報告された。

(6) 2015 年度大会・2016 年度大会

- ・西田委員より、2015 年 10 月 10 日 (土) ~ 12 日 (月) に滋賀県立大学 (彦根) で行う予定であることが確認された。
- ・齊藤会長より、2016 年は札幌で開催される見込みであることが報告された。

2：審議事項

(1) NPO 法人への移行手順

- ・会費の納入をもって各会員の法人移行への合意とすることが確認され、任意団体の総会にはかかることが決まった。
- ・会費の納入方法は、郵便振替、銀行引き落とし、口座入金のいずれも可。
- ・現理事の任期は来年の彦根大会まで。現任意団体の運営委員の任期は、任意団体の解散まで。今年中に解散ができそうにないので、現運営委員の任期延長の必要があるこ

とが確認され、任意団体の総会にはかかることが決まった。

(2) 事務局

- ・2014 年 4 月~8 月の法人の予算案と決算案が承認された。
- ・2014 年 9 月からの会計年度分に関する予算案が承認された。
- ・法人の規則案について審議され、修正を経て承認された。任意団体の総会にはかかる内容が決まった。
- ・PE の Editorial Coordinator 職務明細についての文書が承認された。事務長が引き継ぐ。

(3) 選挙日程

- ・理事と副会長の選挙を会員の移行が終わった段階で行うことが決まった。
- ・選挙日程の目安と選挙管理委員について、理事会での審議を経て会長が選挙管理委員会を委嘱することが承認された。

(4) 総会議事次第

- ・10 月 11 日行われる任意団体の総会議事次第が承認された。

(5) その他

- ・会員数について、および、これからの個体群生態学会の運営について議論が交わされた。今後も抜本的な学会運営の見直しも含めて議論を行うこととなった。
- ・ポスター賞の位置づけについて審議した。学会ウェブサイト「年次大会において特に優れたポスター発表を行った数名の研究者にポスター賞を授与します」と記載することに決まった。

●2014 年度個体群生態学会総会報告

日時：2014 年 10 月 11 日 (土) 16:45-18:20

場所：筑波大学

1. 会長挨拶
2. 事務局報告：内海事務長より、第1回および第2回の運営委員会議事について報告された。
3. PE 編集事務局報告：佐藤編集委員長より、編集・投稿状況などについて報告された。
4. 会報編集報告：石原編集担当委員より、編集状況が報告された。
5. 2015 年度彦根大会の案内：西田委員より、10 月 10-12 日頃に滋賀県立大学にて開催さ

れることが案内された。

6：予算・決算関連

(1) 2013 年度決算 (報告)：運営委員会で承認された決算が報告された。

(2) 2014 年度予算 (審議)：予算案が、全員一致で承認された。

7：審議事項

(1) 来年度の会費をNPO法人の会費として納入したことをもってNPO法人の会員になることに同意したこととみなすことが承認された。

(2) ①上記移行手続きの完了をもって任意団体を解散すること、②解散に際して、すべての義務、権利関係を新法人に引き継ぐこと、③解散時に任意団体の財産をすべて新法人に寄付すること、④任意団体の解散時期は運営委員会に一任すること、が承認された。

(3) 任意団体の役員について任意団体の解散が完了するまで延長することが承認された。次のNPO法人としての選挙時期についての説明がされた。

(4) NPO 法人の規則案の審議が行われた。必要な文言統一や書式訂正などの改訂を行うことを含めて、規則案が承認された。

●2015 年度春 個体群生態学会運営委員会
兼 理事会 議事録

日時：2015 年 6 月 7 日 (日) 13:00-16:00
場所：北海道大学北方生物圏フィールド科学
センター研究棟 (ビデオ会議)

参加者：石原、近藤、佐藤、瀧本、辻、津田、
椿、西田、松浦、吉田、徳永 (2014 年度大
会実行委員長)、齊藤、岸田、内海

委任状：巖佐、粕谷、仲間

1：報告事項

(1) NPO 法人移行経過報告

・齊藤会長より、法人口座の開設、会員移行状況について報告された。移行手続きが完了していないため任意団体の解散は秋の総会まで延期されることが認められた。

(2) PE 編集

・佐藤編集長より、順調に編集が進んでいることが確認された。論文を公表した著者の満足度が高いというアンケート結果が報告された。

(3) 会報編集

・津田編集担当委員より、次号の内容や編集状況が報告された。

(4) 生物科学連合

・吉田委員より定例会議の議事とスケジュールについて報告された。

(5) 2015 年度彦根大会 (西田委員)

・西田大会実行委員長より、2015 年 10 月 10-12 日に滋賀県立大学で開催される大会について、実行委員体制、スケジュール、シンポジウムの内容などが報告された。

(6) 2016 年度北海道大会

・齊藤会長より、高田壯則会員を中心として札幌で開催される見込みであることについて報告された。

(7) 事務局

・2014 年 3 月 26 日から 2014 年 8 月 31 日までの事業報告を京都市に提出したことが確認された。

2：審議事項

(1) 2014 年つくば大会収支

・徳永大会実行委員長より、大会収支決算が報告され、承認された。

(2) 奨励賞

・今回は該当者なしという選考結果が報告され、審議した。選考委員会の選考結果が承認された。

(3) 事務局

・任意団体と法人それぞれの 2014 年 8 月までの決算が承認された。また、移行期のため 2014 年 9 月から 2015 年 8 月の任意団体と NPO 法人の予算が確定できないこと、秋の理事会と総会時にそれぞれの予算と決算を確定させることが承認された (本報告末尾に詳細、および資料 1・2)

・定款の一部変更が提案されて承認されたため、総会で審議することが決まった。

・規則の最終案が承認された。

・2016 年度若手科学者賞の推薦依頼があり、推薦する候補者について審議した。

(4) PE における研究倫理

・研究倫理を各論文上で記載する事や記載フォーマットの用意が提案された。引き続き、編集委員会で議論することが決まった。

(5) その他

・学会誌印刷体の購入数の削減、学会誌寄贈の取りやめ、理事会のオンライン化推進による旅費削減について議論が交わされ、いずれも承認された。

◆法人移行期における会計について

NPO 法人としての個体群生態学会の定款で

は「事業年度は、毎年9月1日に始まり、翌年8月31日に終わる」と定められています。そのため、NPO法人においてはその事業年度に即して会計も行っていきます。具体的には、「活動計算書(P23-24資料1)」が昨年度NPO法人の事業期間(2014年3月26日~2014年8月31日)の収支報告です。これは既に京都市に提出してあります。その一方で、任意団体の会計年度は4月1日から3月31日です。このため、任意団体からNPO法人への移行にあたってズレが発生します。そこで今回より、移行期の措置として、任意団体の収支報告もNPO法人の事業年度にあわせることとしました。それが2014年度個体群生態学会収支報告書(一般会計・特別会計、P25-26資料2-1・2-2)になります。これらの繰越金は新法人に寄贈という形で引き継がれます。

しかしながら、任意団体の解散がまだ完了していないため移行における会計の整理が完了しておりません。そのため、NPO法人と任意団体のそれぞれについての2014年9月1日から2015年8月31日までの具体的な予算書を作成することができませんでした。会報71号にて任意団体としての2014年4月1日~2015年3月31日までの予算を報告していますが、そちらをもとに会計運営をしておりますので、どうかご理解をお願いいたします。2014年9月1日から2015年8月31日までのNPO法人と任意団体の収支報告につきましては、今年10月に予定されている彦根大会での総会において報告し、みなさまに審議をしていただくこととなります。よろしくお願いたします。

資料 1

2014 年度 活動計算書
2014 年 3 月 26 日から 2014 年 8 月 31 日まで

特定非営利活動法人
個体群生態学会
(単位：円)

科目	金額		
I 経常収益			
1. 受取会費			
正会員受取会費	0		
学生会員受取会費	0		
正会員ウェブ会員受取会費	0		
学生ウェブ会員受取会費	0		
外国 1 会員受取会費	0		
外国 2 会員受取会費	0		
2. 受取寄附金	0		
3. 受取助成金等	0		
4. 事業収益			
個体群生態学普及啓発事業	0		
学会奨励賞授与事業	0		
5. その他収益			
受取利息	0		
雑収益	0	0	
経常収益計			

科目		金額	
経常収益			
II	経常費用		
1.	事業費		
	(1) 人件費		
	給与手当	0	
	人件費計	0	
	(2) その他経費		
	旅費交通費	0	
	通信運搬費	0	
	その他経費計	0	
	事業費計		
2.	管理費		
	(1) 人件費		
	人件費計		
	(2) その他経費		
	消耗品費	0	
	通信運搬費	0	
	旅費交通費	0	
	その他経費計	0	
	管理費計		
	経常費用計		
	当期経常増減額		
III	経常外収益		
1.	事業費 固定資産売却益		
	経常外収益計		
IV	経常外費用		
1.	事業費 過年度損益修正損		
	経常外費用計		0
	税引前当期正味財産増減額		0
	法人税、住民税及び事業税		0
	当期正味財産増減額		0
	前期繰越正味財産額		0
	次期繰越正味財産額		0

2014 年度個体群生態学会

収支報告書

(2014 年 4 月 1 日～2014 年 8 月 31 日)

一般会計

収入の部

単位:円

科 目	決算額	備 考
会費	858,500	国内正会員(一般) 526,000 国内正会員(一般オンライン) 235,000 国内正会員(学生) 23,000 国内正会員(学生オンライン) 40,000 国外正会員 34,500
会誌編集補助	1,390,000	
利子収入	148	
雑収入	210,812	学術著作権協会複写使用料
小計	2,459,460	
前年度繰越金	2,067,295	
合計	4,526,755	

支出の部

単位:円

科 目	決算額	備 考
事務長事務費	27,430	
会報印刷費	79,980	会報 No71
会報編集費	57,400	会報 No.71
会誌編集費	537,420	
印刷・通信	24,653	PE56-2、その他
雑費	8,977	
旅費	415,884	運営委員会
生物科学学会連合会費	50,000	
小計	1,201,744	
NPO 法人へ寄贈	3,325,011	
合計	4,526,755	

資料 2-2

2014年度個体群生態学会
収支報告書
(2014年4月1日～2014年8月31日)

特別会計

収入の部

単位:円

科 目	決 算 額	備 考
利子収入	459	
小計	459	
前年度繰越金	5,762,191	
合計	5,762,650	

支出の部

単位:円

科 目	決 算 額	備 考
雑費	0	
一般会計に繰入	0	
小計	0	
次年度繰越金	5,762,650	
合計	5,762,650	

Population Ecology 編集報告

第56巻(2014年)は論文総数57本, 658ページで発行しました。第57巻(2015年)は, 1号の出版が遅れたために, やや遅れ気味になっています。現在3号の編集中です。4号までの掲載論文総数は60本程度になる予定です。会員の皆さまのご協力に感謝します。

投稿状況

別表(表1)のように, 2014年の投稿論文数の合計は152本(うち特集論文は12本, 総説は4本)でした。地域別に見ると, 欧州(34.9%)が顕著に多く, 日本(16.4%), 日本を除くアジア(15.8%), 北米(15.8%)となっています。国別投稿数の1位は日本の25本で, 前年(20本)より増加しています。また, 投稿国が分散している傾向は維持されています。

2015年のこれまでの投稿数は80本です。これは, 一昨年同期の107本, 昨年同期の98本を下回っています。

2014年度の投稿論文の受理率は, 現時点では平均で29.0%です。最終的な受理率は, 2012年が37.6%, 2013年が29.9%となっています。この数値は地域による変異が高いのが特徴です。日本からの論文の受理率は圧倒的に高く(60%以上), 北米も高く(40%以上), 欧州がそれに続いて平均的で, 投稿数は少ないもののオセアニアも高くなっています。アジア(日本を除く), アフリカ, 中南米, 中東からの論文の受理率は低い状態が続いています。

審査経過

2014年に受け付けた論文のうち61.8%(94編)は60日以内に1回目の審査を終え, 著者にその結果を伝えました(図1)。1回目の審査日数の平均値は51.2日, 査読に回らず編集長, 副編集長, 担当編集委員の段階で棄却された原稿(Editor reject)の割合は30.3%でした。2012年の平均日数およびEditor rejectの割合は, 42.5日および35.1%, 2013年のそれは45.2日および40.3%でした。Editor rejectになる論文は減少したのですが, 審査にかかる時間は増加してしまいました。査読プロセスでのリマインダの間隔を短くする等の

対策を講じた上で, 原因を探りたいと考えています。

出版されるまでに時間がかかる雑誌は, 投稿が敬遠されて, 掲載される論文の質も下がってしまうことが懸念されます。投稿から出版にいたるまでには実に様々なプロセスがありますが, その中でも特に, 査読者の決定と, 査読者による審査が重要な律速段階となっています。ここ数年にわたって, 担当編集委員からの査読依頼が断られてしまう傾向が続いています。これには例えば, 雑誌の増加にともなう査読依頼の増加, 査読者自身の多忙化, 分野やテーマの細分化, 等の理由が考えられます。会員の皆様には, *Population Ecology* の良質な内容を維持するためにも, ぜひ査読依頼を引き受けてくださるようお願いいたします。また, 査読審査の結果報告の迅速化にもご協力ください。

特集と総説

第56巻(2014年)には, 特集「Mathematical Models for Effective Environmental Management」(編集:横溝さん・瀧本さん)が出版されました。また, 舞木さん・近藤さんと高木さん・宮下さんの2つの総説が掲載されています。第57巻(2015年)もすでに, 「Unravelling ecological networks: complexity-stability relations and diversity of interaction types」(編集:難波さん)と「Reproductive interference: ecological and evolutionary consequences of interspecific promiscuity」(編集:京極さん)の2つの特集と, 仲澤さんと高橋さんの2つの総説が出版されています。第58巻(2016年)にも, 特集が掲載される予定です。

特集の提案は随時受け付けており, その要綱は以下のサイトからダウンロードできます

(Special Features: For Organizers) :
<http://www.springer.com/life+sciences/ecology/journal/10144>

ふるってご提案ください。

編集長・佐藤一憲

表 1. Population Ecology 編集報告 (2015年7月29日現在)

投稿 (2014年分)

	国内	国外	合計
受理	14	24	38
棄却	9	84	93
未決	2	17	19
取り下げ	0	2	2
合計	25	127	152
受理率	60.9%	22.2%	29.0%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	25	2	11	38
棄却	92	1	0	93
未決	17	1	1	19
取り下げ	2	0	0	2
合計	136	4	12	152
受理率	21.4%	66.7%	100.0%	29.0%

投稿 (2015年分)

	国内	国外	合計
受理	2	2	4
棄却	4	37	41
未決	4	31	35
取り下げ	0	0	0
合計	10	70	80
受理率	33.3%	5.1%	8.9%

原稿種別

	原著	総説	特集	合計
受理	0	0	4	4
棄却	41	0	0	41
未決	33	0	2	35
取り下げ	0	0	0	0
合計	74	0	6	80
受理率	0.0%			8.9%

インパクトファクター

2006	2007	2008	2009	2010
1.534	1.314	1.895	1.539	1.846
2011	2012	2013	2014	
2.287	1.923	1.7	1.57	

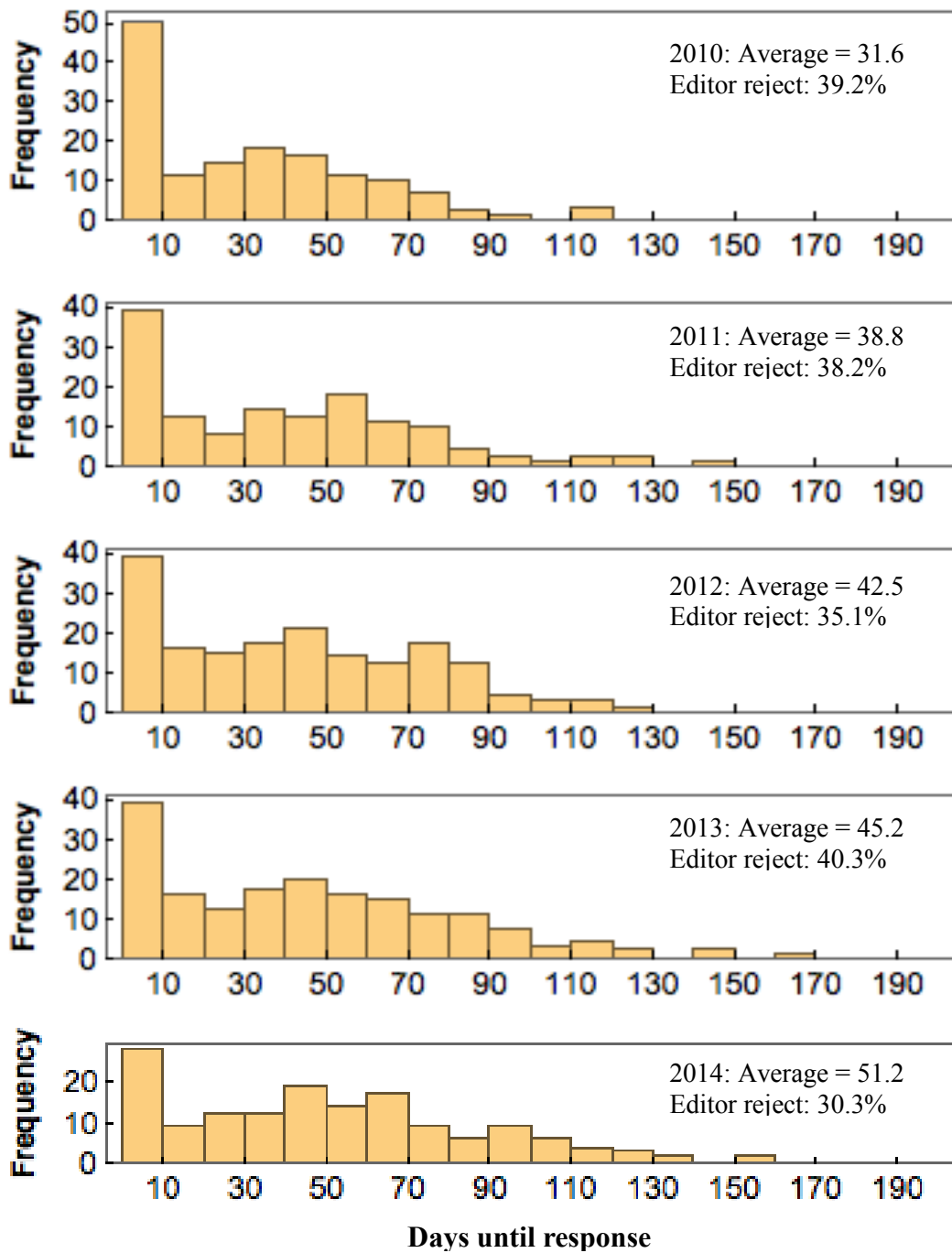


図1. 1回目の審査終了までの日数ごとの論文数(2010年から2014年). "Editor reject"は審査に回らず編集長, 副編集長, 担当編集委員の段階で棄却された原稿の割合を示す.

会員異動

個人情報保護法に鑑み、個体群生態学会会報のWeb版では会員の異動情報を公開しておりません。

会員情報変更の際の連絡のお願い

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更があった場合には、個体群生態学会の Web サイトの「会員手続」を通じて必ずご連絡ください。

編集後記

石原前編集長からバトンタッチされてから初の本号は、図らずも元会長の伊藤嘉昭先生の追悼特集になりました。執筆者には、伊藤さんと親交のあった個体群生態学関係者を、齊藤会長や辻理事などからの候補者を考慮したうえで、佐藤編集長が企画するPopulation Ecology 誌での追悼論文の執筆者との重複をできるだけ避けて選びました。なかには連絡手段が郵送に限られ、時間の制約と執筆の労力から依頼をあきらめた方もいました。執筆者の方々には、急な依頼に短い時間で対応してくださったことを、この場を借りて御礼申し上げます。猛暑のハンガリーでの調査・実験と時期が重なり、編集作業が遅れたことをお詫びいたします。

集められた原稿を拝見すると、伊藤先生が日本の生態学の一時代を鼓舞し続けた研究者だったことが熱く語られています。また、追想のなかに次世代へのメッセージが随所

に見つかり、どの年代にとっても読みごたえのある特集となりました。

私自身、伊藤先生にお会いする機会は多くなかったものの、ずいぶん前の沖縄シンポに呼ばれて講演した際に「旅費は出ないけれども、招待講演だから」と配慮のお言葉をいただいたことを思い出しました。個体群生態学会に親しみを感じるのは、こんなこともあるからでしょう。伊藤先生らの著書「動物生態学」とその新版（嶋田先生ら著）は、今も大学院生や若手研究者に教科書として薦める良書のひとつです。

ありがとうございました。そして、これからも本学会をお見守りください。

個体群生態学会会報編集長
津田 みどり
(九大院・農・生防研)

個体群生態学会への連絡先

1. 退会・住所変更・会費納入に関する問い合わせ先

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内 個体群生態学会

TEL 075-451-4844

FAX 075-441-0436

郵便振替口座

口座番号 : 00950-6-97521

口座名称 : 個体群生態学会

メールアドレスの変更も含め、会員情報に変更のあった場合には、必ず土倉事務所に連絡をお願いいたします。

2. その他の学会業務に関する問い合わせ先

〒074-0741

北海道雨竜郡幌加内町母子里

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

個体群生態学会 事務長 内海俊介

TEL 0165-38-2125

FAX 0165-38-2410

個体群生態学会会報 No. 72

ISSN0386-4561

2015年8月31日印刷

2015年8月31日発行

発行 個体群生態学会

〒603-8148

京都府京都市北区小山西花池町1-8

(株)土倉事務所内

印刷 (株)サガプリンティング

〒849-0936

佐賀市鍋島町森田909番地

TEL 0952-34-5100

FAX 0952-34-5200